

読賣新聞

2015年(平成27年)

8月18日 火曜日

発行所 読売新聞東京本社 〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1 電話(03)3242-1111(代) www.yomiuri.co.jp

70歳大学生 被災者支援

サークル設立 故郷・気仙沼の仮設訪問

東日本大震災で津波にのまれながら命をとりとめた70歳の大学生、東京福祉大社会福祉学部4年の太田初子さん(群馬県伊勢崎市)が、故郷の宮城県気仙沼市で被災者支援を続けている。17日には、孫世代の学生たちと共に被災者にかき氷と笑顔を届けた。



「今年も来たよ」。17日午前、約2200人が暮らす気仙沼市立面瀬中学校の仮設住宅で、太田さんを始め

太田さんも避難所や仮設住宅で日々を過ごした。「もっと勉強して被災者を支えたい」。2012年4月に67歳で大学に入学生、キャンパスがある伊勢崎市に戻った。学内に被災者支援サークルを設立し、学生たちと年2〜3回、気仙沼市を訪問。被災者の話を聞き、相談に乗る傾聴活動に取り組み、炊き出しを行い、夏はかき氷を届けて

当にありがたい。交流を楽しみにしている人も多い」と話す。

太田さんは「傾聴の技術を磨き、一人でも多くの人が前向きに生きていけるよう支えたい」と、精神保健福祉士の国家資格取得を目指す。来年も必ず来るよ。古希の大学生は、故郷の被災者たちに約束した。

学生ら8人は、イチゴ味のかき氷を作り始めた。天気は曇りで連日の暑さは和らいだが、2時間で約1000人分を振る舞った。太田さんは、外出できない高齢者宅3か所も訪問し、「元気でですか?」体調はどう?と声をかけ、かき氷を配った。

かき氷には忘れられない思い出がある。仮設住宅にいた11年夏、佐賀県から被災者支援に来た4人家族がかき氷を振る舞ってくれた。「仮設は暑くて何もなかったから、本当によろしかった」。他の被災者たちも涙を流して喜んだ。

太田さんと小中学校が一緒だった仮設住宅の自治会長(70)は「自らも被災したのに気仙沼まで足を運んでくれて本

群馬県大東町で就職し、26歳から同県伊勢崎市で暮らし、62歳で夫を亡くす。父の看病もあり帰郷。63歳で気仙沼高定時制に入学し、高校で学ぶ夢をかなえた。

震災は高校3年の時だった。逃げる途中に津波に襲われたが、市職員に助けられた。妹夫婦が亡くなり、仮設住宅の手伝いかき氷を

▲被災者太田さん(左)と17日、宮城県気仙沼市中

仮設住宅の手伝いかき氷を

▲被災者太田さん(左)と17日、宮城県気仙沼市中

▲被災者太田さん(左)と17日、宮城県気仙沼市中